日本を代表する橋の下からEMによる浄化プロジェクト

「お江戸日本橋……」の歌でもご存知、かつての東海道、現在の国道の起点でもある東京・日本橋。その下を流れる日本橋川は井の頭公園を水源とし、神田川から分岐し隅田川に注ぐ全長4.8㎞の川です。

江戸時代には物流を支える運河の役割を果たし、戦前までは泳げる川だったとか。しかし時代とともに両岸はコンクリートに固められ、上を高速道路に覆われてからは汚染も進み、人々から忘れ去られた川になってしまったのです。

そんな中、2005年、「名橋『日本橋』保存会」が毎年の恒例行事として継続していた「橋洗い」イベントでEM石鹸を採用し、水質浄化を願って3000個のEM団子を川に投入しました。

これをきっかけに2006年からは「日本橋法人会」、「日本橋ロータリークラブ」、「日本橋川・神田川に清流をよみがえらせる会」も川の浄化プロジェクトに参加。浄化に使われるEM活性液製造プラント等の技術協力は「NPO地域環境共生ネットワーク」が担当するなど、大きな広がりを見せています。

水質浄化に威力を発揮する、EM団子とは？

泥や土と一緒にEMを練り込んで発酵・乾燥させたもの。汚れた川や海へ投入すると、EMがヘドロを徐々に分解して砂地化し、微生物の力で自然がもともと持っている自浄作用や生態系の循環がよみがえります。

魚や水鳥たちが戻ってきた！

EMの投入が始まってから2年、2007年4月の調査では川底にイトミミズやゴカイなどが発見されました。以来、随所で小魚たちが確認され、それをねらって飛んでくる水鳥も姿を見せ始めたのです。

小さかった魚も次第に大きくなり、中には40㎝を超えるスズキやボラも。2007年11月に行われた魚釣り大会では、釣れにくい寒い時期にもかかわらず30分ほどで5匹のハゼが。また2008年に入ってボラの大群も川を回遊するまでになりました。

EM投入を始めた当初は生き物がほとんどいなかった川底に、戻りつつある自然の生態系。今後も多くの人々の継続的な取り組みによって、川はどんどん元気になっていくことでしょう。

「以前では信じられないこと」と魚釣り大会の参加者も大よろこび。こんなにもたくさんのボラが遡上！水面にも鳥たちもやって来ました。

【これまでの活動】

日本橋の「橋洗い」

2005年からはEMも活用。橋はもちろん「日本国道路元標」もピカピカに！

毎年多くの市民が参加する恒例行事は、昨年で38回を数えました。

EM団子の投入

2006年1月には地元住民や企業300人とともに千代田区長も参加して、新三崎橋から川へ投入。

2007年には外濠（牛込濠）でも投入、地元企業や大学生など大勢のボランティアも参加しました。
そのほか、数々のイベントを通して、2008年6月現在で累計142,500個が投入されています。

EM活性液の投入

2006年に日本橋川浄化プラントが完成。

完成式では地元の児童たちが寄贈されたボートに乗ってEM活性液の投入を見学しました。

Report 2008.10.27

三越日本橋本店・三越劇場で、環境フォーラム「よみがえれ！日本橋川」が開催されました。

日本橋川での市民たちによる生態系復活へのチャレンジは日本全国にも大きなインパクトを与えています。昨年秋、東京で行われたこのフォーラムには各地で河川浄化活動に取り組む方々も全国から集まり、会場の三越劇場は満員盛況。日本橋川のほか、大阪の道頓堀川、淀川、愛知の矢作川、三重の阿瀬知川などでの活動報告と今後の展望を発表するとともに、後半では比嘉照夫教授による講演や、市民による対談で活発な意見交換が行われました。

「川の表情には、その地域の品格が表れます」と、比嘉教授は環境浄化の必要性を語りました。

活動メンバーからは「EMは環境だけでなく、人の輪もはぐくんでくれます」という感想も。